

Title	Gallia 59号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 157-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77100
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

卒業論文要旨

マザリナードの機能—シラノ・ド・ベルジュラックによるマザリナードを例に—

涌井萌子

本論では、フロンドの乱期に大量に出回った批判文書「マザリナード」について、シラノ・ド・ベルジュラックによって書かれた7編を題材にその特徴や機能について考察した。

第一章ではマザリナードの定義を確認し、シラノがマザリナード執筆に乗り出した社会的背景やシラノ自身の個人的な事情を明らかにした。絶対王政確立期に国政を恣にするマザラン枢機卿に対して内乱が勃発し、このフロンドの乱の間に大量に出回った政治的な文書一群をマザリナードと呼ぶ。乱勃発の翌年、シラノが暮らしていたパリとマザランとの間に明確な対立関係が生まれ始め、パリは王軍によって包囲された。戯曲創作が座礁し貧困状態にあったシラノは、包囲により物資がパリ市内に入ってこなくなると生活に窮するようになり、爆発的に流通し始めたマザリナードの執筆に乗り出した。

第二章ではより詳細にマザリナードの内容を分析し、シラノの思想について考察した。政治的な思想において、シラノはマザランが行った政策に否定的であったが、マザランがフランス人ではないということを攻撃理由とする主流の論調からは距離をとっていた。道徳的な思想に

ついて、シラノは無神論を掲げる過激なリベルタンとして認識されているが、マザリナードを書いた当時はキリスト教から完全に離れた人物ではなく、リベルタンとしての異端思想もキリスト教的思想も同列のものとしてシラノの中に存在し、論理の根拠としてその都度、都合の良いものを選択していたと分かった。

第三章ではシラノによるマザリナードを、性質の変化というより大きな視点で分析し、シラノにとって「マザリナードとは何か」について考察した。経済的な理由で、収入を得る手段としてマザリナードに手を出したというのは、以前から言われてきたことである。しかし、経済的な理由だけでは説明できないマザリナードの性質変化が見られ、マザリナードはシラノの中で確かに、自身の信義を表現する媒体になっていったことが分かった。